

わが国最初の日本語訳クルアーンにみられる 仏教語をめぐって (二)

東 隆 眞

On the Buddhist terms in the first Japanese translation of Qur'an (2)

Ryūshin AZUMA

In 1920 Sakamoto Reishū (Kenichi), Japanese scholar, translated the Qur'an into Japanese for the first time. This title of the book is 'Kōran-kyō. In this 'Kōrankyō', he translated the Qur'an by using the Buddhist terms. I am going to study this from the five points of view. As the prestage of this study, in this article I will consider (1) the Japanese translations of the Qur'an, (2) the concept of Buddhist terms, (3) the translation of 'The Qur'an' into the foreign languages, and (4) the life of Sakamoto Reishū (Kenichi)

Contents (2)

On the Buddhist terms in the "Kōran-kyō"

- a. The formation of the "Kōran-kyō" which, I suppose, adopt the case of Buddhist Sacred books.
- b. The example of expressing of Allah by using the Buddhist terms.
- c. The example of expressing Islam doctrine by using the Buddhist terms.
- d. The case of using the Buddhist terms as transliterated words.

目次 (1)

はじめに

日本におけるクルアーンの翻訳

「仏教語」について

アラビア語クルアーンの外国語訳について

『コーラン経』の訳者坂本蠡舟(健二)のことども

目次 (2)

『コーラン経』の仏教語

a 仏教経典の形式を採用していると推定される『コーラン経』の組織構成

b 仏教語を用いてアッラーをあらわしている例

c 仏教語によってイスラームの教義をあらわしている例

d 仏教語を音写語として用いている例

おわりに

『コーラン経』の仏教語

わが国最初の日本語訳クルアーンと目されている坂本蠡舟(健二)訳『コーラン経』には、仏教語を使用してその形式をととのえ内容を翻訳している点がある。『コーラン経』は、儒教の言葉(たとえば仁慈)、道教の言葉(たとえば道院)、神道の言葉(神祇)なども使っており、仏教語だけを用いているのではないが、仏教学徒として『クルアーン』に注目する私の関心は、仏教語である。しかし、従来、『コーラン経』に仏教語が登場していることについては、管見によるかぎり、従来こ

れを指摘した者がいない。日本イスラム協会の編集・発行にかかわる「イスラム世界 2」(一九六四年七月発行)には、「(座談会)「日本におけるイスラム学の歩み」(司会 井岡峻一 出席者 蒲生礼一 内藤智秀 野原四郎 前嶋信次 松田寿男 松林亮という記事がある。その「3、日本におけるコーランの翻訳など」の項で、次のような文章が見える。

司会 大川周明さんのコーランが出たのは、

野原 あれは大分あとです。

司会 それから慶応の井筒俊彦さんのが出ましたね。

松林 有賀さんの聖香蘭経が早いですね。日本でのコーラン翻訳は、どなたもその用語に大分骨折ってるようですね。

野原 それはいい問題を出された。大久保さんも大分いろんなことを言っておられましたね、お経のような言葉を使ったり、和語のような言葉を使ったりね。そんなに基準は無かったですね。その時その時の調子でやっていたのではないですか。

松林 その点から言いますと、例の阪本健一さんの直訳、あれは一番いいですね。簡潔で。

野原 井筒さんのは御覧になりましたか。

松林 見ました。

前嶋 モスレムの人には、ああいうのはね。

松林 いや、ああいうのが本当ではないんですかね。沙漠の中の骨のある連中ですから、あの方が本当だと思うのですか。

前嶋 コーランには詩の言葉が、非常に多く書かれていますからね。

文章語ですから。

松林 いや、ああいうのは前嶋さんあたりでなくちゃわからない。

内藤 アラビア語は、口語と文語で相当違いますからね。

松林 大川周明さんのは仏教関係でしょう。言葉が。

内藤 あれは中学生の時分から漢籍の素養があったものですからね。

その頭で、あそこの精神病院の中で、ドイツ語から訳したものです。それで訳語の選択には漢語がね。

日本語訳クルアーンのうち、大川周明訳註の『古蘭』(二九五〇年)には、「仏教関係」の「言葉」や「漢語」が見られるとか、大久保幸次訳『邦訳コーラン』(二九五〇年)には「お経のような言葉を使ったり」とあるが、しかし坂本蠡舟訳『コーラン経』は「直訳」で「簡潔」で「一番いい」とある。一九六四年の時点での坂本の『コーラン経』が直訳で簡潔で一番いいかどうかを批評する能力は私にはないが、しかし坂本の『コーラン経』の仏教語について全く言及されていないのは、私には全く不可解である。坂本『コーラン経』には仏教語が随処に見られるからである。

坂本『コーラン経』のあと、有賀阿馬土・高橋五郎共訳『聖香蘭経(イスラム教典)』(一九三八年)、大久保幸次訳『邦訳コーラン』(一九五〇年)、大川周明訳『古蘭』(一九五〇年)などに、仏教語が登場する頻度は高いが、完全には言えないまでも、期を画して仏教語が払拭されたと見てよいのは、責任編集藤本勝次・伴康哉・池田修共訳『コーラン』(一九七九年)あたりからではなからうか。

ここで、日本人のイスラム理解、イスラムと仏教とのかかわりを、日本の仏教学徒の一人として吟味、検討する立場から、以下に坂本蠡舟訳『コーラン経』にあらわれた仏教語の事例をいくつかとりあげて見たい。

そのまえに、坂本蠡舟は、なぜ『コーラン経』翻訳にあたって仏教語を充てたのか。その事情、背景ないし動機、理由については、坂本自身にも記述するところがないので、直接の手がかりがえられない。察するに、明治、大正時代の比較的多数の日本人が所有していた無意識裡の仏教的環境ないし仏教的教養が坂本の翻訳作業の営みのなかにも、仏教語として意識され、かつ顕現しているのではなからうか。

坂本が理解し解釈した限りでのクルアーンにおける仏教との類同性、共通性と思われる点については、意識的に仏教語を導入したのであるうか。いま一つは、坂本は、仏教とのかかわりの有無にはあまり頓着せず、仏教語を使用したのであろうか。

いずれにせよ、坂本においては、それが私のように仏教学僧であり仏教学徒である者にとっては明らかに仏教語であったとしても、仏教に依って『クルアーン』を翻訳して『コーラン経』となしたのではなかったであろう。あえて言えば、少なくとも、坂本にとっては、結果として仏教語を使うしか方法がなかったという場合もあったのであろう。したがって、仏教語で『クルアーン』を翻訳したとしても、それは仏教とはなんの関係もなかったのであろう。事実、坂本によって『クルアーン』が仏教語を用いて翻訳されたからと言って、その後『クルアーン』が仏教的に解釈し変容したという現象は直接に発生しな

った。また、坂本訳『コーラン経』が日本仏教に宗教的、思想的影響を与えたというような事態にも至らなかった。

ただ、仏教語を用いて『クルアーン』を翻訳することは、詮ずるところ、『クルアーン』を純粹に信仰するムスリムたちにとっては必ずしも全面的に理解され歓迎されるものとは言えないのではないか。同時に、仏教学僧、仏教学徒の私の立場から見れば、仏教語の誤用、誤解ないし概念の混乱を招きかねない。今後に向けてのひとつの提言として、『クルアーン』は仏教語によって翻訳しないという方途をめざすべきであろう。そのためにも、以下、坂本訳『コーラン経』の仏教語をとりあげ、その幾つかについて、吟味、検討しておくことは、十分に意義のあることであろう。

a 仏教經典の形式を採用していると推定される『コーラン経』の組織構成

『コーラン経』(「凡例」には可蘭経と記す。可蘭と記するのは、先述のとおり、中国のムスリムたちの表記であって、これは坂本を先行する)は、左に示すように、標題に、『コーラン経』と「経」の文字を使用し、各章は、「序品」にはじまって、以下それぞれに「品」の文字を使用している。

コーラン経 上

目次

序品 [UL FATIHA] 第一 (九六 九六一〇三)……(一)

第一篇 第一部	………(一)
黄牛品 [UL BAQR]	第二 (六八 七四一〇〇)……(二)
第二部	………(一八)
第三部	………(三五)
伊牟蘭品 [AL IMRAN]	第三 (七三一一一 九九)……(四三)
第四部	………(五五)
女人品 [AN NISA]	第四 (七四一〇六 九一)……(七〇)
第五部	………(七四)
第六部	………(九五)
餐卓品 [UL MAIDA]	第五 (一一一〇八 一〇六)……(一〇〇)
第二篇 第七部	………(一一六)
畜牛品 [AL ANAM]	第六 (八一〇四 一一)……(一一四)
第八部	………(一二四)
隔壁品 [AL ARAF]	第七 (八七 一〇七 一〇一)……(一五三)
第九部	………(一六六)
掠略品 [AL AUFAL]	第八 (九二 一〇二 九五)……(一八六)
第十部	………(一九二)
懺悔品 [AL TAUBA]	第九 (八九 一〇五 一〇二)……(一九九)
第十一部	………(二二六)
猶奈須品 [AL YUNAS]	第十 (九三 九二 一〇四)……(二三三)
第三篇	………(二三三)
布度品 [AL HUD]	第十一 (九四 九〇 八二)……(二四二)
第十二部	………(二四二)

猶須布品 [AL YUSUF] 第十二 (一〇三) 九四 九二 (一六〇)

第十三部 (一六八)

雷電品 [AL RAAD] 第十三 (一〇〇) 九三 一〇五 (一七七)

伊不拉欣品 [AL IBRAHIM] 第十四 (一〇八) 九七 八九 (一八五)

巖谷品 [AL HAJR] 第十五 (一〇二) 八六 九〇 (一九四)

第十四部 (一九四)

蜜蜂品 [AL NAHL] 第十六 (一〇七) 九一 九三 (三〇二)

以色列品 [AL BANI ISRAIL] 第十七 (一〇九) 八〇 九四 (三三〇)

第四篇 第十五部 (三三〇)

洞穴品 [AL KAHAF] 第十八 (一〇五) 六八 一〇八 (三三六)

第十六部 (三四五)

瑪利亞母品 [AL MARYAM] 第十九 (一一三) 八七 九六 (三四九)

他哈品 [THA HA] 第二十 (一二四) 九五 一一三 (三五九)

(括弧内の数字は、上段はシェラル・ウツマンの、中段はネルデクの、下段はムイアの説による年代順)

ローラン經 下

目次

豫言者品 [UL AMBAYYA] 第二十一 (一二一 一〇三) 七四 (一)

第十七部 (一)

巡拜品 [AL HAJJ] 第二十二 (一五三) 八五 一一二 (一三三)

眞信者品 [UL MUMINUN] 第二十三 (一八〇) 七三 八七 (一四四)

第十八部 (二四)

光明品 [UN NUR] 第二十四 (一九七 一〇一) 九七 (三四)

差別品 [AL FURQAN] 第二十五 (一九一 九九) 八八 (四四)

第十九部 (四六)

詩人品 [AL SHU'ARA] 第二十六 (一八五 八二) 八〇 (五二)

第五篇 (五二)

蟻蠅品 [AN NAMAL] 第二十七 (一九五 八一) 八一 (六四)

第二十部 (六九)

故事品 [AL QASAS] 第二十八 (一〇六 五三) 八四 (七三)

蜘蛛品 [AL ANQUBUT] 第二十九 (一〇一 八四) 八六 (八五)

第二十一部 (九〇)

羅馬品 [UR RUM] 第三十 (七五 一〇〇 一一〇) (九四)

鹿古曼品 [LUQMAN] 第三十一 (一〇四 七九) 八五 (一〇一)

崇敬品 [US SJIDA] 第三十二 (七七 七七) 八三 (一〇六)

連盟品 [UL AHZAB] 第三十三 (五〇 七八) 七八 (一一〇)

第二十二部 (一一四)

娑婆品 [US SABA] 第三十四 (九〇 八八) 七七 (一一一)

造化品 [UL FATTIR] 第三十五 (八六 八九) 七六 (一二九)

耶信品 [YA SIN] 第三十六 (五四 七五) 七五 (一三六)

第二十三部 (一三八)

位階品 [US SAFAT] 第三十七 (三八 八三) 七〇 (一四三)

第六篇 (一四三)

左度品 [AL SWAD] 第三十八 (七 六九 一〇九) …… (二五二)
 軍衆品 [AL ZAMR] 第三十九 (七一 五一 一〇七) …… (二五九)
 眞者信品 [AL MUJIN] 第四十 (三六 五一 五五) …… (二六九)
 解説品 [AL FUSSILAT] 第四十一 (二五 五六 五六) …… (二七九)

第二十四部

商量品 [AL SHORI] 第四十二 (三五 七〇 六七) …… (二八六)
 金裝品 [AL ZUKHRAF] 第四十三 (一九 五五 五三) …… (二九四)

第四期

煙氣品 [AL DUKHAN] 第四十四 (二〇 一二 三二) …… (三〇二)
 跪坐品 [AL JASIYAH] 第四十五 (五六 一〇九 三九) …… (三〇六)
 砂丘品 [AL AHQAF] 第四十六 (二六 一一三 七三) …… (三二〇)
 麻詞末品 [MUHAMMAD] 第四十七 (二七 一四 七九) …… (三二六)
 捷利品 [AL FATAH] 第四十八 (二八 一 五四) …… (三三一)
 内房品 [AL HUFJRAF] 第四十九 (一七 五四 三四) …… (三三五)
 可布品 [AL QAF] 第五十 (一〇 三七 三一) …… (三三八)

第二十六部

撒布品 [AL ZARIYAT] 第五十一 (一一 七一 六九) …… (三三二)
 山嶽品 [AL TUR] 第五十二 (二二 七六 六八) …… (三三六)
 星辰品 [AL NAJM] 第五十三 (一五 四四 四一) …… (三三九)

第二十七部

太陰品 [AL QAMR] 第五十四 (六 五〇 七一) …… (三四三)
 慈悲品 [AL RAHMAN] 第五十五 (三七 二〇 五二) …… (三四七)
 難抗品 [AL WAQIA] 第五十六 (三一 二六 五〇) …… (三五二)
 黑鐵品 [AL HADDI] 第五十七 (三四 一五 四四) …… (三五五)
 爭女品 [AL MUJADALAH] 第五十八 (三九 一九 四四) …… (三六〇)

第二十八部

遷徙品 [AL HASHR] 第五十九 (四〇 三八 三七) …… (三六四)
 試女品 [AL MUMTAHINA] 第六十 (四一 三六 三〇) …… (三六八)

戰列品 [AL SAF] 第六十一 (四二 四三 二六) …… (三七二)
 集會品 [AL JUMA] 第六十二 (四三 七一 一五) …… (三七三)
 偽善品 [AL MUNAFIQUN] 第六十三 (四四 六七 五一) …… (三七五)
 相欺品 [AL TAGHABUN] 第六十四 (四五 二三 四六) …… (三七七)

第五期

離婚品 [AL TALAQ] 第六十五 (四六 二二 七二) …… (三七八)
 禁制品 [AL TAHRIM] 第六十六 (五一 二五 三五) …… (三八二)
 王國品 [AL MULK] 第六十七 (八八 一七 三六) …… (三八四)
 光筆品 [AL QALAM] 第六十八 (一八 二七 一九) …… (三八七)
 不誤必來品 [AL HAQQAT] 第六十九 (一六 一八 一八) …… (三九〇)
 階段品 [AL MAARIZ] 第七十 (七一 三三 二七) …… (三九三)

第二十九部

階段品 [AL MAARIZ] 第七十 (七一 三三 二七) …… (三九三)

諸品 [NUH]	第七十一	(一四)	四一	四一	……	(一九五)	壓伏品 [AL GHASHIYA]	第八十八	(三)	四六	一六	……	(三一九)
妖精品 [AL JINN]	第七十二	(二一)	四五	四〇	……	(一九七)	曉天品 [AL FAJR]	第八十九	(三三)	六	一三	……	(三三〇)
包套品 [AL MUZZAMMIL]	第七十三	(三三)	一六	三八	……	(三〇〇)	靈地品 [AL BALAD]	第九十	(六〇)	一三	二九	……	(三三一)
掩蔽品 [AL MUDDASSIR]	第七十四	(三一)	三〇	二五	……	(三〇一)	太陽品 [AL SHAMS]	第九十一	(四)	二	七	……	(三三三)
復活品 [AL QIYAMAT]	第七十五	(五一)	一一	二〇	……	(三〇五)	暗夜品 [AL LAIL]	第九十二	(九九)	九八	一一三	……	(三三四)
人間品 [AL INSAN]	第七十六	(六七)	一四	四三	……	(三〇七)	光輝品 [AL ZUHA]	第九十三	(五七)	六四	一四	……	(三三五)
神使品 [AL MURSALAT]	第七十七	(六九)	二二	二二	……	(三〇九)	開胸品 [AL INSHIRAH]	第九十四	(四七)	六二	九八	……	(三三六)
新聞品 [AL NABA]	第七十八	(七〇)	四〇	一一	……	(三一二)	無花果品 [AL TIN]	第九十五	(六一)	八	一	……	(三三七)
奪魂品 [AL NAZIAT]	第七十九	(七八)	二八	一〇	……	(三一四)	凝血品 [AL ALAQ]	第九十六	(五五)	四七	三	……	(三三八)
響聲品 [AL ABAS]	第八十	(七九)	三九	一四	……	(三一六)	力夜品 [AL QADR]	第九十七	(七六)	三	八	……	(三三九)
摺疊品 [AL TAKWIR]	第八十一	(八二)	二九	六	……	(三一八)	明證品 [AL BAIYANA]	第九十八	(一三)	六一	四七	……	(三四〇)
分裂品 [AL INFITAR]	第八十二	(八四)	三一	六四	……	(三一九)	地震品 [AL ZIZAL]	第九十九	(九八)	五七	六	……	(三四一)
偷量品 [AL TATFIJ]	第八十三	(三〇)	四一	二八	……	(三二二)	戰馬品 [AL ADIYAT]	第一百	(五九)	四	五	……	(三四二)
分散品 [AL INSHIQAQ]	第八十四	(二九)	一〇	三三	……	(三二四)	打擊品 [AL QARIA]	第一百一	(一〇)	六五	五九	……	(三四三)
天徽品 [AL BURUJ]	第八十五	(八三)	三四	二二	……	(三二五)	競望品 [AL TAKASUR]	第一百二	(二四)	五九	四	……	(三四四)
太白品 [AL TARIQ]	第八十六	(二)	三五	二二	……	(三二七)	午下品 [AL ASAR]	第一百三	(二二)	三三	五八	……	(三四五)
至上品 [AL ALA]	第八十七	(八)	七	一七	……	(三二八)	讒謗品 [AL HANAZA]	第一百四	(六三)	六三	六五	……	(三四五)
							香象品 [AL FIL]	第一百五	(五八)	二四	六三	……	(三四六)
							孤列種品 [AL QURAIH]	第一百六	(四九)	五八	二四	……	(三四七)

第二十節

必需品 [AL MAUN] 第一百七 (六六) 二二 (三三) …… (三四七)
豐澤品 [AL KANTHAR] 第一百八 (六五) 四八 五七 …… (三四八)

不信品 [AL KAFIRRN] 第一百九 (六四) 六六 六二 …… (三四八)

神助品 [AL NASR] 第一百十 (六一) 六〇 四八 …… (三四九)

焰父品 [AL ABU LAHAB]

第一百十一 (四八) 一〇 六〇 …… (三五〇)

唯一神品 [AL IKHLAS] 第一百十二 (五) 四九 六六 …… (三五〇)

拂曉品 [AL FALAQ] 第一百十三 (九) 九 四九 …… (三五二)

人間品 [AL NAS] 第一百十四 (一) 五 九 …… (三五二)

(第二十三の眞信者は複數、第四十のは單數。) (括弧内の數字は、上段はジェラル・ウツチンの、中
第七十六の人間は單數、第一百十四のは複數。) (段はネルテケの、下段はムイアの說による年代順)

坂本は、「コーランの經文」「百十四品」について、「コーラン經の後
に書す」(『コーラン經』下 附録) に、

「コーランの經文は百十四品スラに分る。每品の長短一樣ならず。スラ
Sura(Surah)は他の文獻には空觀の語にて、その意は列、次、序の類に
て、例えば建築の磬磚の列層軍隊の兵士の列次をいふが如し。猶太数
にて五部書の五十三章をセダリムと稱するも亦スラはトラの複數なり。
毎品には原普通の譯本に用ひらるゝが如き數目なし。唯題目あり。
題目なきは序品のみにて、羅甸の舊譯本には之を品數に加へず。題目
は、品中の特殊の事件人物等より採るも、多くは經文の語を採れり。
但傳本によりてはこの品題の異なるものあり」と説明している。

さて、標題に、「經」字や、見出しに「品」字を使用するのは、漢訳

大乘仏典のきわめて一般的な用例である。大乘仏教の代表的な、そし
て日本人にもっともよく知られている漢訳仏典の一つ、鳩摩羅什(三三
〇—四〇九?)が西曆四〇六年に翻譯した『妙法蓮華經』八卷二八品すな
わち『法華經』は、次のとおりである。(法華經普及會編『眞訓
兩譯法華經并開結』
昭和一四年五版 平樂寺書店刊)

妙法蓮華經

序品第一

方便品第二

譬喻品第三

信解品第四

藥草諭品第五

授記品第六

化城諭品第七

五百弟子授記品第八

授學無學人記品第九

法師品第十

見寶塔品第十一

提婆達多品第十二

勸持品第十三

安樂行品第十四

從地涌出品第十五

如來壽量品第十六

- 分別功德品第十七
- 隨喜功德品第十八
- 法師功德品第十九
- 常不輕菩薩品第二十
- 如來神力品第二十一
- 囑累品第二十二
- 藥王菩薩本事品第二十三
- 妙音菩薩品第二十四
- 觀世音菩薩普門品第二十五
- 陀羅尼品第二十六
- 妙莊嚴王本事品第二十七
- 普賢菩薩勸發品第二十八

漢字の、そして漢訳仏典の「經」、「品」について、『岩波 仏教辞典』(岩波書店刊)は、次のように解説している。

「經きょう [S:sutra] <契経> <貫経> <正経> <聞経> <本経> <契>
 <文>なども訳す。原語 sutra は <修多羅> <修妬路> などと音写。
 sutra は動詞 < sivi(縫う、貫く)から作られた中性名詞。a thread, string,
 line, cord などの英訳が与えられる。古来 <貫穿の意> あるいは <縫綴
 の義> があると解釈されている。もともとバラモン(婆羅門)教では、教
 えの内容を短い文句で簡潔にまとめて暗記に便ならしめたものを
 sutra (スートラ)と呼んだ。それは肝要を述べているが、ヴェーダ聖典

に次ぐ第二次的聖典としての意義をもっていた。このスートラという語を仏教で借用したと思われる。しかし仏教では独自の意味・用法を与えている。

仏教最古の用例は、九部經・十二部經のうちの第一分に置かれる<經>である。『大毘婆沙論』卷二二六には「諸經の中に散説する文句なり。諸行無常 諸法無我 涅槃寂靜と説くが如し」といい、『顯揚聖教論』卷十二には「長行の直説にして、諸法の体を撰するもの」と解釈。要するに <端的に法の内容を簡略にまとめた聖典中の散文> である。この意味での <經> は、仏教聖典が經律二藏に分れる以前のもので、律藏中の波羅提木叉やこれと併行する發達過程をたどった中部分別品(二三五―一四〇經、中阿含根本分別品(三一、一六二―一六四、一六九―一七一)などに見出すことができる。

第二段の <經> は、大乘涅槃經北本卷十五に「如是我聞よりないし歡喜奉行にいたる、かくの如きの一切を修多羅と名づく」というように、<如是我聞―歡喜奉行> 形式のもので、阿含から大乘にいたるまでの多くの個別經典の一般形式である。パーリ聖典では、<中部> 中の經典はすべて sutta と名づけられ、長い經典を集めた <長部> では suttantā と名づけられて区別される。しかし、いずれも <經> と和訳する。

第三は個別の經典を集めて編纂した叢書としての經藏 (Sutra-pitaka) であり、戒律に関する文献を集めた律藏 (vinaya-pitaka) に対応する集成をいう。經律二藏が原始仏教時代に成立したあと、部派時代に論藏が成立してインドで三藏が揃う。さらに大乘・密教の時代に成立す

る大乘や密教の聖典もまた「経」と呼ばれる。これが第四段である。

中国に仏教が伝わると、あらゆる経律論とそれに関連する文献が大蔵経とか一切経の名の下にまとめられるが、日本ではさらに各宗派の宗祖や祖師たちの著述や作品までもその中に包括せられ、これらすべてが俗に「経」といわれる。」

「品ほん 漢語の「品」は、もろもろ（のもの）・種類・等級などの意味を持ち、特に魏晋以降における社会の門閥化に伴い、官秩や家格の「品別」（等級化）が広く行われ、文学・芸術の分野においても作家や作品の品別を行う形式の評論が多く作られた（『詩品』『古画品録』『書品』等）。

仏典における「品」には二義がある。一は、サンスクリット語 *varṇa*（同類のまとまり、段落）もしくは *parivarta*（ひとめぐり、篇章）の訳で、典籍の「篇」や「章」のこと。二は、サンスクリット語 *prakāra*（種類）や *kalāpa*（まとまり）の訳で「品類」とも漢訳され、事物の種類もしくは同類の事物のまとまりを意味し、『大毘婆沙論』『俱舍論』などに頻見する。なお観無量寿経では、浄土に往生する者の性質・行為および果報を九等の「品」に分けて説いているが、この場合の品は「等級」の意味に近い。レ九品。

「かのくにに九品の差別あり、われらいづれの品をか期すべき」（二三部経大意）「経の文義を習ひ悟りて、毎日に一品を講じて」（今昔二三）

これによって一目瞭然であるが、『コーラン経』の「経」、「序品」、「品」の形式は『法華経』の「経」、「序品」、「品」の形式に酷似している。しかし、漢訳仏典の「経」、「品」には、仏教独自の意味があることは、上掲の『岩波 仏教辞典』によって知られるとおりである。私の立場からみれば、『コーラン経』とし、「序品」、「品」としたのは、不適切な表現だと言わざるをえない。責任編集 藤本勝次 伴康哉 池田修共訳『コーラン』（一九七九年 中央公論社刊）は、標題を、ただ単に『コーラン』とし、最初を「開巻の章」とし、以下、「章」で統一しているが、この方がより適切であろう。

ところで、周知のとおり、経、品という文字は、儒教や道教でも用いられている。

儒教の根本教典は、一般に「四書五経」ということばで知られている。「四書」とは、『大学』、『中庸』、『論語』、『孟子』である。「五経」とは、『易経』、『書経』、『詩経』、『礼記』（四書は、この「礼記」のなかに入る）、『左氏春秋』である。これらの「経」は、社会や人間が生活する不変のすじみち、道理を述べた聖賢の書籍の謂である。

道教には、鎌田茂雄博士著『道蔵内仏教思想資料集成』（昭和六一年 東京大学東洋文化研究所刊）によると、『靈宝無量度人上品妙経』、『元始説先天道德経』、『無上内秘真蔵経』、『太上無相総真文昌大洞仙経』など四〇数種類の「経」が列挙されて、なかでも『太上一乗海空智蔵経』という「経」には、序品、哀歎品、法相品、普説品、問病品、持誠品、平等品、供献品、捨受品、普記品というように、「品」で内容が組織構成されている。鎌田博士によれば、これら道教経典は、仏教思想を用い、

仏教経典を引いているのである。

仏教経典のたとえば『法華経』以外に、右の通り、儒教や道教の経典が「経」や「品」などを用いているのであるから、坂本は、たとえば直前の道教の『太上一乗海空智蔵経』などにヒントをえて『コーラン経』とし、「序品」、「黄牛品」などとしたのかも知れないという可能性ももちろんあるのである。ただ五四八五巻の上海版道蔵は、一九二三年から四年間を費やして上海の商務印書館が復刻したという（窪徳忠著『道教の神々』平河出版社刊 一九九三年第一版第七刷）が、これは坂本が『コーラン経』を刊行した大正九年（一九二〇年）以後のことであるから、おそらく坂本は披見していない可能性が高いのではないか。

先述したとおり、坂本の『コーラン経』（『可蘭経』）は、中国のイスラームの影響下にあつたことはまちがいない。中国では『天経』、清代には、『真経』『聖經』『可蘭経』のように、経としてクルアーンが翻訳されていたのである（小林元著『同回』昭和一五年 博文館刊）。加えて、『コーラン経』は、『法華経』の影響を受けたのではなからうか、と推測するものである。

b 仏教語を用いてアッラーをあらわしている例

『コーラン経』は、その冒頭、アッラーについて、次のように記している。

コーラン経 上

序品第一【ウル・ファチハト】黙伽

大慈悲神の名に於て

第一篇 第一部【第一章】

神を頌へよ、萬物の主宰、最大慈悲、審判の日の王。爾をわれ（吾曹）禮拜す、爾にわれ援助を請ふ。われを導け、正しき道に、爾が寛仁なりしもの、道に、爾が怒れる者背き去りし者の道ならで。

そして、全一一四品の冒頭には、必ず（ただし「懺悔品 第九」のみは唯一の例外である）

大慈悲神の名に於て

とあるのである。これはくりかえすが一一三品の冒頭に必ず見える一文である。さらに「慈悲なる神」、「慈悲神」、「神は大慈悲なり」など、枚挙するいとまもないほどである。

ここで、問題は、アッラーを「大慈悲神」、「最大慈悲」などとするところの「慈悲」の語である。『コーラン経』以後の日本語訳クルアーンも、この点はほとんど全く同様である。

大慈悲のアッラーの御名において

万有の主

大慈悲の神

審判の日の王たるアッラーに栄光あれ

我等は汝に仕えまつり、汝が御護りを冀う

仰ぎ願くは我等を正しき道と

汝が御恵みを垂れたまひしもの道へと導きて

汝が怒りたまうものと迷えるものとの道へと導きたまうことなかれ

訳（大久保幸次訳『邦訳コーラン』）

大慈者・大慈者アルラーハの名によりて

アルラーハを讃へよ、そは三界の主 大悲者・大慈者 審判の日の執

権者なり 吾等汝に事へ、佑助を汝に求む 吾等を直き道に導け、汝

が恩寵を垂るる者 汝の怒に触れず、また迷はざる者の道に（天川周明訳

註『古蘭』）

慈悲ふかく慈愛あまねきアッラーの御名において……

讃えあれ、アッラー、万世の主

慈悲ふかく慈愛あまねき御神

審判の日（最後の審判の日）の主宰者

汝をこそ我らはあがめまつる、汝にこそ救いを求めまつる。

願わくば我らを導いて正しき道を辿らしめ給え、

汝の御怒りを蒙る人々や、踏みまよう人々の道ではなく、

汝の嘉し給う人々の道を歩ましめ給え。（井筒俊彦訳『コーラン』）

大慈大悲のアッラーの御名によりて

言え、「私は、人間の主、人間の王、人間の神（であるアッラー）におすが

りします。身を隠して人間の胸にささやく悪魔の悪より逃れ、また妖
霊より、人間より逃れて」と。（田中四郎訳『秘典コーランの知恵』）

慈悲ふかく慈愛あつき神の御名において

神に讃えあれ、万有の主、

慈悲ふかく慈愛あつきお方、

審判の日の主宰者に。

あなたをこそわれわれは崇めまつる、あなたにこそ助けを求めまつる。

われわれを正しい道に導きたまえ、あなたがみ恵みをお下しになった

人々の道に、

お怒りにふれた者やさまよう者ではなくて。（伴康哉 池田修共訳『コーラ
ン』）

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において。

万有の主、アッラーにこそ凡ての称讃あれ、

慈悲あまねく慈愛深き御方、

最後の審判の日の主宰者に。

わたしたちはあなたにのみ崇め仕え、あなたにのみ御助けを請い願う。

わたしたちを正しい道に導きたまえ、

あなたが御恵みを下された人々の道に、

あなたの怒りを受けし者、また踏み迷える人々の道ではなく。（日本ムス
リム協会訳注解『聖クルアーン』）

恵みあまねく 慈悲ふかき

神・アツラーの 名により

讃えまつらん アツラーを

そは万有を しろしめし

恵みあまねく 慈悲ふかく

審判の日をぞ つかさどる

おんみをこそは 崇めなむ

おんみにこそは すがらなむ

導きたまえ 直き道

嘉したまえる 人の道

怒りにふれし 者どもや

迷える者の 道ならず (アリ・安倍治夫訳『聖クルアーン』)

『コーラン経』がアツラーを「大慈悲神」、「最大慈悲」と訳出し表記して、その後の日本語訳クルアーンが「大慈大悲」、「大悲者」、「大慈者」、「慈悲ぶかく」、「慈悲あまねく」などと、表現語句の微細な差異、変遷はあるが、いずれにせよ「慈悲」ということばによってアツラーをあらわしている点では、基本的には変りはない、同一であるとうけとめてよいであろう。ところで、『コーラン経』の「慈悲」という訳語はどこに由来するのか。直接の根拠を私は知らない。

さて、いずれにせよ、「慈悲」は、仏教語である。仏教の特長といつか仏教独自の教義、実践をあらわす語句の一つであると考えられている。仏教の慈悲についての論究や説明は、これまでいろいろなされて

きているが、グローバルな視野から多角的に鳥瞰し、その特質を要領よくまとめた代表的な著書は、管見によるかぎり中村元博士の『慈悲』(一九九四年第一刷 平樂寺書店刊)である。よって仏教の「慈悲」についての全体像の詳細は本書にゆずるが、中村博士は、本書の冒頭で、

「慈悲は仏教の実践の面における中心の徳である。『慈悲は仏道の根本なり』。慈悲は仏そのものであるときえもいわれる。日本でも、慈悲は仏教そのものであり、仏は慈悲によってわれわれ凡史を救うものであると考えられている。」

と述べている。

そして、「慈悲」の語義について、

「慈悲とは「いつくしみ」「あわれみ」の意味であると普通に理解されている。ときには「他人に対する思いやり」「気がね」の意味に用いられることさえもある。たしかにいちおうはそのとおりに解して差支えないが、われわれはさらに語源にまで遡って考えてみたいと思う。

「慈」と「悲」とはもとは別の語である。慈とはパーリ語の *metta*、サンスクリット語の *maithi*(または *maitra*) という語の訳である。この原語は語源的には「友」「親しきもの」を意味する *mitra* という語からの派生語であって、真実の友情、純粹の親愛の念、を意味するものであり、インド一般にその意味に解せられている。これに対して「悲」とはパーリ語及びサンスクリット語の *karuṇā* の訳であるが、インド一般

の文献においては「哀憐」「同情」「やさしさ」「あわれみ」「なきげ」を意味するものである。

しからは、慈と悲とどちらがうか、ということが問題となる。南方アジアの上座部仏教においては、「慈」(metta)とは『(同朋に)利益と安樂ををもたらそうと望むこと』(Mittasukhuppanayana-kamata)あり、悲(Karuna)とは『(同朋から)不利益と苦を除去しようとする』(anivadukka-panaya-kamata)であると註解している。

このような解釈は、また大乘仏教にも継承されている。例えば、ナーガルヂユナはいう、『慈とは、衆生を愛念することに名づけ、常に安隱と樂事とを求めて、(それを)以てこれ(衆生を)饒益す。悲とは、衆生を愍念することに名づけ、五道の中の種々の身の苦と心の苦とを受くるなり。』『大慈とは一切の衆生に樂を与え、大悲とは一切の衆生のために苦を抜く。大慈は喜樂の因縁を衆生に与え、大悲は離苦の因縁を衆生に与う。』

かかる解釈はその他の諸経論にもあらわれている。例えば、ブスバンドウは、『慈とは同じく喜樂の因果を与うるが故なり。悲とは同じく憂苦の因果を抜くが故なり。』という。

ただしその後の大乘経典にはこれと正反対の解釈のあらわれていることもある。例えば、大乘の『大パリニルヴァナ経』では仏の大慈を慈と區別して、『諸の衆生のために無利益を除くこと、これを大慈と名づく。(また)衆生に無量の利樂を与えんと欲すること、これを大悲と名づく。』という。この解釈を受けて、シナの曇鸞も『苦を抜くを慈と曰い、樂を与うるを悲という。ここに依るが故に一切衆生の苦を抜き、

悲に依るが故に無安衆生心を遠離せり。』という。

また大乘の論書のうちには、右と多少連関があるが、しかし異った解釈も述べられている。『生きとし生けるものが専ら苦のあつまりを身に受けていることを縁起の道理によって觀じつつあるときには、悲あわれみが起り、また、これらの生きとし生けるものはすべて、この専らなる苦のあつまりから、われによって解脱さるべきである、と觀じつつあるときには、慈が起る。』すなわち生存者が苦しんでいるのに同情するときに「悲」であり、苦を抜いてやろうと決心するときに「慈」なのである。

しかしこれらは仏教乃至インド宗教一般としては、例外的な解釈であろう。後代においては、『慈しみとは樂を与えるものである。』(Seyyavajjalāyā)というのが諸宗教一般に認められている解釈であった。シナ及び日本の仏教諸派は専らナーガルヂユナの解釈に従っているようである。』

と述べている。

そもそも仏教の「慈悲」は、論理的には、全ての存在の生命の同一性と、刹那性、關係性にもとづく無実体性の空觀の智慧を裏付けとして成り立っており、仏のみならず、諸菩薩、諸祖師、一切衆生の本質も、「慈悲」と觀するのである。

大乘仏教の代表的經典の一つである『觀無量壽經』には、「仏心とは大慈悲これなり」(原漢文とあり、『妙法蓮華經』には「如来は大慈悲あり」(原漢文とある。あるいは、『大般涅槃經』(南本)には、「大慈大悲

を名づけて仏性となす。なにをもつてのゆえに。大慈大悲はつねに菩薩に随うこと、影の形に随うがごとし。一切衆生、必定して当に大慈大悲を得べし。このゆえに説いて、一切衆生悉く仏性ありという(原漢文と示している。これらによれば、仏・如来は大慈大悲(慈悲を最大限に表現した。東註)であり、菩薩も大慈大悲であり、一切衆生もその本質、可能性は、大慈大悲にほかならないのである)。

それでは、仏教の「慈悲」と、イスラームのアッラーないしキリスト教のゴッドの「愛」とは同じであるのかないのか。ふつう日本では、両者をほとんど同一視しているようである。この点について、中村博士は、次ぎのように述べて、「仏の慈悲を神の愛と直ちに同一視することとはできない」と明言している。私もこの趣旨に基本的には賛意を抱いている者であるので、ここに紹介しておく。

「しからば、同じく宗教的に絶対者に由来する愛であるという点で、仏の慈悲とキリスト教で説く神の愛とは同一視されてよいであろうか。現在多くの日本人は、この両者を殆んど同一観念であるかのごとくに考えている。この問題に関連して、禪僧からキリシタンとなり、のちに再び転宗した邦人イルマン・ハビアンハビアンの著『破提字子ていじし』には、世界創造者としての神には慈悲がないということを主張している。すなわち

『五千年の間に科送なければ、一切世界の人間(が)、地獄に墮おちべきこと無量無数なるべし。……其を見ながら哀とも思はず、五千年來衆生済度の方便に心を傾けざるを慈悲の主と云(は)んや。』

と批評している。インドでも、世界創造神を想定する教説に対して仏教徒やチャイナ教徒はちようどこれと同様の論難を発している。世界を創造した神は、何故にこのような不完全な世界をつくったのであるか。われわれの現実の生活にいかんともしがたい苦しみや罪惡の存することが厳とした事実である以上、われわれにかかる苦しみを与えた世界創造神が絶対の慈悲であるということは考えられない。また一方では非常な幸福を楽しんでいる人もあるのに、他方では悲惨な運命に泣いている人も少なくない。何故にこのような不公平が存するのであるか。かかる不公平の存在することは最高絶対の神の徳を傷つけるものである。こういう論難に対しては、世界創造神を想定した後代のニヤーヤ学級及びヴェーダーンタ学派は何とか弁明をしなければならなかった。これは西洋近世哲学においても辯神論(Theodicee)の問題として取り上げられている。

第二に、世界創造神を想定する多くの宗教においては、たとい人が神に救われたとしても、神と人との間には絶対の断絶がある。人は救われても神そのものとなることはできない。ところが仏教においては、仏がわれわれ凡夫を救い取ったあとでは、凡夫は仏そのものとなるのである。凡夫も究極の根柢においては仏と一致している。仏は凡夫を仏と同じものになしたもうが故に、その慈悲は絶対なのである。もしもその間に差別があるならば、その慈悲は絶対であるということはできない。」

以上の二つの理由により、われわれは仏の慈悲を神の愛と直ちに同

一視することはできない。」

このような次第で、「慈悲」ないし「大慈大悲」は、仏教語であり、
仏教のもっとも重要な教義、実践をあらわす言葉であるから、この「慈
悲」を、その性格や教義が全く相違するイスラームのアッラーに当て
るのは、少なくとも仏教の側からみると、不適正であるといわなけれ
ばならない。

C 仏教語によってイスラームの教義をあらわしている例

一例だけ挙げておく。

『コーラン経』の「第九」は「懺悔品」である。いま、問題するこ
ころは、この「懺悔」である。「懺悔」(さんげと訓む)は、仏教語であ
る。キリスト教も「懺悔」(さんげと訓む)を使う。キリスト教の「懺悔」
については門外漢であるので、『キリスト教大事典 改訂新版』(昭和五
四年四月二八日 改訂新版第五版 日本基督教協議会文書事業部 キリスト教大事典編集
委員会 編集 教文館刊)を見ると、次ぎのように説明されている。

「さんげ 懺悔 [英] Confession of sins [独] Sündebekentnis *

悔改めは、必ず自己の罪を明白にいいあらわし、赦罪を求める行為を
伴う。これを懺悔という。個人的な懺悔と集団的な懺悔とがある。受
洗の前に懺悔することは当然のことであったし、特別の罪を犯した者
が懺悔を求められることは、古くから行われたことであるが、これは
やがて*告解の秘跡に発展する。告解が秘跡であることを否定するプロ

テストント諸教会も、牧会上、個人的に罪の告白をきき、処置するこ
とはよく行われ、特に最近、その意義を再確認しはじめている。一方、
礼拝において聖餐にあずかる前に陪餐者が罪を告白することは、九世
紀頃に起源を持つ。その方法は教派によって異なるが、そのための一
定の式文を用いるのが普通である。礼拝をかなり簡素化している教会
でも懺悔だけは必ず行うところがあるほど、重要なものである。しか
し日本では懺悔をしない教会が多い。

さんげしよ《懺悔書》(フ) Libri poenitentiales [英] Penitential
Books 聴罪司祭に対する解説・指導書。告解における祈りや質問、あ
らゆる場合の罪、それに対するつぐないを記したもの。コロンバヌス
がゴールで書いたもの(五九〇頃)は、それまでのものを集約し、また後
代のものの土台となった。

わが国では、何時ごろからキリスト教において「懺悔」の文字が用
いられるようになったか私は知らないのであるが、かのフランシス
コ・ザビエル(一五〇六一一五五二)が一五四九年鹿児島に上陸して本邦最
初のキリスト教伝道を開始するずっと遙か以前より、仏教教団におい
ては、「懺悔」が仏教語として使用され、定着して来ているのである。

仏教語としての懺悔については、『岩波 仏教語辞典』は、

「懺悔 さんげ [s:desanā, ksama, pati karoti, āpatti-pratidesanā]
《悔過》ともいい、自ら犯した罪過を仏や比丘の前に告白して忍容を
乞う行儀、《懺悔》または《悔過》と漢訳されたサンスクリット原語は

種々ある。中国仏教では、忍んで許してくれるよう乞う意の「懺摩」(ksama)と、過去の罪過を追悔する意の「悔」との合成語とする。律では満月と新月の説戒に、夏安居の終了日に、戒本を誦し、違反した罪を一人(対首懺)ないし四人(衆法懺)の大僧に告白した行儀で、apatti-pratidesana(他に対して告白すると称した。阿含経では釈尊に罪を告白して許した例が多く、大乘仏教では十方仏や諸仏を礼して身口意三業の罪やあらゆる罪過を発露し懺悔する行儀となり、中国ではこれが特定の儀礼となつて懺法の儀則が成立した。天台智顛は、懺悔を行動に表す事懺と、実相の理を觀法することで罪過を滅する理懺に分け、作法(律の懺悔)・取相(觀法)・無生(理懺)の三種にも分類した南山律の道宣は、戒律の制教懺を小乗とし、業道の罪を懺悔する化教懺をすべて

の仏教に通ずるものとする。天台仏教では法華懺法中「十住毘婆沙論」に依用する懺悔・勸請・隨喜・回向・發願を「五悔」と称し、すべてを懺悔の内容とする。密教では「へごかい」という。また浄土教の善導は、毛孔や眼から血の出る上品から涙を出す下品までの三懺悔を述べ

るが、後に中国・日本では懺悔の行儀は次第に儀礼化するに至つた。

「法華経」一巻を誦しをはりて、三宝を礼拝し、衆の罪を懺悔せり」

と説明している。いま、一般的理解としてはこれで十分であろう。しかし、さらに一步踏みこんで言うならば、唯一、絶対、天地万物の創造主としての神を立てぬ仏教、なかならず大乘仏教、禪の立場から言えば、詮ずるところ「懺悔」は、自受用三昧の坐禪の自己が基準になる

のであつて、けつして言うところの神に対して罪人の人間が行うのではないのである。

しかし、『コーラン経』「懺悔品」の「懺悔」には、そのような仏教的意味は当然あるはずもない。

「懺悔品」には、

(渠等の攻撃の)許されざる月の過ぎ去るや何處にまれ出遭ふところに偶像信者を殺せ、そを(捕囚として)執へよ、そを圍め、あらゆる便宜の場に渠等を要せよ。されど若し渠等悔ひ、定時の祈禱を行ひ定制の施興を為す人には自由に渠等を赦せ、神は大度にして慈悲なれば。若し偶像信者のあるもの保護を爾曹に請はば、之に保護を與へよ、渠の神の語を聞き得るために。其後渠をその安全の場に達せしめよ。これ渠等は(爾曹が説く致の優秀なるを)知らざる民なればなり。

(参考までに、責任編集 藤本勝次 伴康哉 池田修共訳『コーラン』では、この箇所は「神聖月が過ぎたならば、多神教徒どもを見つけてしめよ、殺せ。これを捕えよ。これを抑留せよ。いたるところの通り道で待ち伏せせよ。しかし、もし彼らが悔い改めて、礼拝を守り、喜捨を行なうならば、放免してやれ。神は寛容にして慈悲ふかいお方である。」と訳されていて、より判読しやすい)とあつて、この一段が私には印象深く眼に映る。要するに、異教徒である「偶像信者」(前掲の『コーラン』、井筒俊彦訳『コーラン』は、「多神教信者」と訳している)は「殺せ」、しかし「悔ひ」(懺悔する)て、アッラーに「祈禱を行ひ」、「定制の施与を為す人」は「赦」してやれというのであろう。

「懺悔品 第九」の「解題」において、坂本は、「麻訶末がタブクを伐つや之に従はざりし者を懺悔せしめしなり」と記している。坂本が

著わした『ムハメッド伝』下の第一章「イスラムの半島統一」は、「タブクの役」を設けて、その歴史的状況を叙述している。この点について、前掲の『コーラン』をひもとくと、藤本勝次氏は「本章「懺悔品」を指す 東誌」は内容からすれば宣戦布告に関する啓示が主になっていて、ベルの研究によれば、冒頭の一八まではフダイビヤの盟約の破棄に関係ある啓示で、後半はタブク遠征に関する啓示とされている。フダイビヤの盟約の破棄というのは、六二八年にマホメットがメッカのクライシユ部族とフダイビヤで結んだ休戦盟約を、翌六二九年、一部のクライシユ部族の不信行為を理由として破棄したことをさす。タブクというのはアカバ湾の東方にある町で、六三〇年、アラビア半島北西部のユダヤ教徒やキリスト教徒にたいする示唆のため、マホメットみずから軍をひきいてこの町に遠征した」と書いて、ムハンマドの事跡をあげ、「懺悔品」成立の背景事情の一斑を説明している。

くりかえすが、このようなわけで、異教徒である「偶像信者」が「懺悔」すれば赦してやってもよいが、「懺悔」しなければ「偶像信者」は殺せというのが、「懺悔品」の示す一点であろうと理解される。もしそうであれば、仏教の「懺悔」とは根本的に性質を異にするものである。おおよそ、仏教に、異教徒を抹殺せよという考え方はない。かりにそのような趣旨を説く仏教の一派があるとすると、きわめて特殊な事例というべきであって、仏教を正しく伝承する立場として認めるわけにはいかないであろう。

坂本の『コーラン経』以後、やはり頻繁に仏教語を用いて訳した大川周明の『古蘭』が、坂本と同じく「第九懺悔章」とするのはさてお

くとして、井筒俊彦訳『コーラン』が「九 改俊」とし、責任編集藤本勝次 共訳 伴康哉池田修『コーラン』が「九 悔い改めの章」とし、日本ムスリム協会「聖クルアーン」が「悔悟章」としているのを見るのであるが、これらの方が「懺悔品」よりも、より適正な訳語と言ってよいであろう。

d 仏教語を音写語として用いている例

『コーラン経』の「第三十四」の題名は、「娑婆品」とする。

娑婆品 第三十四(ウス・サバ 黙伽

とある。

「娑婆品」の「娑婆」は、仏教語として日本人にはなじみの深い日常語でもある。問題は、漢字の「娑婆」という音写語である。いま、「娑婆品」は、US SABA(ウス・サバ)のSABAに漢字の娑婆を当てた。仏教語としての「娑婆」について、『岩波 仏教辞典』は次のように解説している。

「娑婆 しゃば サンスクリット語Sahaに相当する音写。われわれが住んでいる世界のこと。Sahaは「忍耐」を意味する。西方極楽世界や東方淨瑠璃世界と違って、娑婆世界は汚辱と苦しみに満ちた穢土であると考えられたため、(忍土)なども漢訳されている。なお、仏滅からみろくぼさつ弥勒菩薩の五十六億七千万年後の下生げしやうに至るまで、娑婆世界は無仏で、

地藏菩薩などがその間の導師であるとされる。「今この娑婆世界は、これ悪業の所感、衆苦の本源なり」〔往生要集大文第六〕

US SABAは、音写語として、漢字を当てるならば、沙波でもよいし、鯖でもよいはずであるが、仏教語の娑婆を当てたのは、仏教徒の立場からみると、誤りとは言えないまでも適切な表記ではないのではないか。

ちなみに、伴康哉 池田修共訳『コーラン』では、「34 サバの章 ヘメツカ啓示全54節」となっている。井筒俊彦訳『コーラン』(下)では、「三四 サバアー メツカ啓示 全五四節」となっている。「サバ」と「サバア」と僅かな表記の相違はあるがいずれにせよ、このような片仮名の表記は一層理解しやすい。坂本『コーラン経』も、「ウス・サバ 黙伽」としているから、この点に限って言えば、われわれ仏教徒も納得がいく。

なお、「娑婆」の「娑婆」には、もとより仏教語の「娑婆」と共通する点はない。クルアーンの「サバア」とは、そもそも「古代イエメンの都の名」であって、この章は、その名にちなんで名付けられた。すなわち、日本ムスリム協会『聖クルアーン』は、

34 サバア章 マツカ啓示 54節

章の説明

本章の名は、第15節以下に記される、古代イエメンの都の名サバアに、ちなんで名付けられる。繁栄を極めたその後は住民が邪悪になが

れ、西暦二世紀の初めころ、貯水池の決壊により一朝にして廃墟になったと伝えられる。この章は明らかにクライシシュ族への警告であるが、また一般的教訓である。本章は精神界の様相について概説される6章(第34〜39章)の中の、最初の章である。本章においては、アッラーの慈悲・偉力・真理を強調する。第35章では諸天使がアッラーの力をいかに表現し、また悪と善、虚偽と真理との相違をいかに表明したかが述べられ、第36章においては、天使を通じて来る預言ならびにクルアーンに対する奉仕。第37章では、悪魔の誘惑について強調される。それから第38章では、ダーウードやスライマーンの場合のように英知と力量によって悪を克服し、アイユーブの場合のように堅忍持久によって悪を制することが述べられ、最後に第39章においては審判の日において、信仰と不信仰が明らかに判別されそれぞれ応報が与えられることが述べられている。これらの諸章はマツカ中期のものとされる。と説明を施している。

おわりに

坂本蠡舟訳『コーラン経』の仏教語の若干をとりあげて、それらを検討、吟味し、その用法は適正を欠くものであることを論究した。『コーラン経』には、そのほかにも「真諦」、「衆生」、「帰依」、「示教」、「法嗣」、「結集」、「説法」など多くの仏教語も見出すことが出来るが、これらの仏教語が誤用されているの言うまでもない。

『コーラン経』の後、大久保幸次訳『邦訳コーラン』にも仏教語は

随処に散見される。「安心」、「無明」、「浄土」、「智慧」、「破邪」、「顕正」、「慈悲忍辱」、「執着」、「空仮」、「誓願」、「帰依」、「信心」などは、その一例である。大久保と期を同じくして登場した大川周明訳『古蘭』も同様で、「三界」、「喜捨」、「本願成就」、「懺悔」、「信心」、「智慧」、「一切衆生」、「齋戒」、「帰命」、「善知識」、「不可思議」、「言語道断」、「精進」などの仏教語を見る。大川周明は、山形県藤塚村の「曹洞宗」の家に生れ、中学時代に大青巒居士や加藤咄堂居士の仏教講演を聴いたけれど、私を宗教的に目覚めさせたのは仏教ではなくて基督教であった。「イエスの人格と信仰とに対する憧憬を深めて行ったにも拘らず、洗礼を受けてクリスチャンとなることが出来なかった。それは私がポーロの基督教又はポーロ・ルッターの基督教を、そっくり其俤自分の信仰とすることが出来なかったからである」其後印度哲学を勉強し、また大乘仏教を玩味するやうになった。「私は観音信仰による松井將軍の安心と、日蓮信仰による石原將軍の安心とを思ひ合せ、人生に於ける宗教の偉大なる力を今更のやうに感じた(中略) 私は之を因縁として暫く宗教について思を潜めることにした。(中略) 私の場合には、母を念ずることが私の宗教であり、私のために安樂の門であった」とみずからの宗教遍歴と仏教信仰、母を念ずる安樂の門を叙述している。同時に、大川は、「われ大学を卒へて数年の後 帝大図書館の特別閲覧室に 晴の日も雨の日も通ひつめて 回教研究に没頭せるころ」うんぬんとしている(大川周明著『安樂の門』昭和二十六年 出雲書房刊)。そして、昭和十七年(一九四二)八月、『回教概論』(慶応書房刊)を著わした。昭和二〇年(一九四五)二月、A級戦犯容疑で逮捕され、昭和二一

年(一九四六)五月、東京裁判第一回公判廷で東条英機の頭を叩き、精神障害のため松沢病院に入院し、昭和二五年(一九五〇)『古蘭』を岩崎書店から出版した(大塚健洋著『大川周明』一九九五年 中央公論社刊)。「私は此の書齋(松沢病院の病室)を指す。東廷に古蘭原典と、十種に余る和漢英仏独の訳本を自宅から取寄せ、昭和二十一年十二月一日から之を読み初めた。それは私が乱心中の白日夢で屢々マホメットと会見し、そのために古蘭に対する興味が強くよみがへったからである」米国病院の診断は私が法廷に立ち得るといふことであつたから、私は晩かれ早かれ巢鴨に帰るものと思ひ込み、古蘭の和訳に没頭することが、獄中消閑の最上策だと考へ、三月十二日米国病院から松沢病院に帰つた翌十三日から早速古蘭訳註に筆を執り初めた。「昭和二十三年十二月十一日、遂に最後の訂正を終へて完全に訳了した」(大川前掲書)。

大川周明の場合、若いころから宗教への開眼があり、各宗教、諸哲学を遍歴して、結局のところ天満天神、阿弥陀如来、八幡大菩薩を本尊とする母を本尊と念ずる安心へ到達していくのであるが、その背景には、やはり濃密な仏教的素養の存することを疑うことは出来ないように思う。この仏教的素養が『古蘭』の訳語のなかに期せずして仏教語として具現したのであろう。大川自身に、翻訳にあたって仏教語への省察、吟味ないし積極的事由があつたようには考えられない。

以上、a、b、c、d項に分けてかれこれ論じて来たが、いちばんの問題点は、坂本の『コーラン経』そして、その後に登場する各訳書にほとんど一貫して共通する「慈悲」という訳語、仏教語であろう。釈尊は慈悲そのものと言ってよい。釈尊の仏教には異教徒の存在を容

認しないとか抹殺するという考えはない。「イスラム以外の教に従ふ者は何人たりとも神に容れられず、来世に於て滅ぶべし」(坂本訳『コーラン経』上 伊牟蘭品第九章(第十七章)「神に反抗せし者を罰するに神は峻烈なり」(坂本訳『コーラン経』下 遷徙品第五十九章(第四章) というのが、文字通り、唯一神アッラーはアッラーに服従しない人びとを全く認めないという考えの意味ならば、漢訳仏教語である慈悲を使つてアッラーを表現することは、無知、無謀の極みである。